

計測工学科 事始めの記

F39 卒 重田 友五郎

1960 年入学、1964 年卒業の計測工学科第 1 回生の重田です。

計測会会長より計測会ホームページを開設するにあたり計測工学科創設期のエピソード等について何か書いてもらえないかとのお話を頂きましたので、半世紀以上昔の話になりますが思い出すままに八十翁の戯言を書きました。

勘違い、記憶違い等による誤りも多々あるかと思いますが老衰としてご容赦下さい。

創設期の時代背景

計測工学科が新設された 1960 年、名古屋地方は前年秋の伊勢湾台風で甚大な被害を被り、災害復旧の真っ只中でしたが、日本全体では戦後の混乱からの復興も進み新しい時代を創造しようとする期待と活気に満ちていました。

日本全体のその頃の時代背景を見ると、

- 60 年安保反対デモが激化したが改訂安保条約は成立し、日米同盟が強化された

1960 年当時の岸信介首相は 1951 年に締結された日米安全保障条約を米軍基地を提供する条約から日米共同防衛を義務付ける条約に改訂し、法案を 5 月の衆議院本会議で強行採決した。

しかし、それに対する幅広い国民からの反対運動が急激に高まり 6 月 15 日には国会正門前で機動隊とデモ隊が衝突し、デモに参加していた東大生の榉美智子さんが圧死するという痛ましい犠牲者を出したが、法案は 6 月 19 日に参議院で自然成立し、岸首相は責任をとる形で 7 月 16 日に辞職し、その後を池田勇人に譲った。

この時の抗議デモの波は名古屋にも波及し、工大生も含む多くの一般学生も参加したデモ隊が栄町交差点を渦巻きデモで占拠する出来事もあった。

- 所得倍増計画が打ち出され高度成長時代に突入した

所得倍増計画は岸内閣の後を継いだ池田内閣が打ち出した経済政策の柱で、1961 年からの 10 年間で実質国民総生産を 26 兆円まで倍増させ国民の生活水準を欧米並みにすることを目標にしていた。

この政策の背骨として策定された「全国総合開発計画」によって太平洋ベルト地帯に工業地帯を形成し重化学工業化が推進され、日本経済は急速に発展した。

4 年後の 1964 年には実質国内総生産が、7 年後の 1967 年には実質国民所得が倍増し、国民誰もが「頑張れば良くなる」と希望を持って懸命に働く時代へと邁進して行った。

実質国民所得の低迷状態が 10 年以上も続き明日が見えない現在の日本社会から見ると夢のような時代だったように思える。

- 新しい産業を興すための新設学科ラッシュ

高度成長時代に突入した日本の産業界から理工系大学に対して、これまでの産業の境界を埋めて将来新しい産業を興すことのできる技術者を求める要望が出てきて、それに対応するため多くの理工系大学で学際的な教育を目指す学科の新設ラッシュが始まった。

名古屋工業大学でも 1960 年度に計測工学科、1961 年度に経営工学科、1962 年度に電子工学科が新設され多くの学生を育てていた。

計測工学科の全てはゼロから始まった

1. ゼロその1: 新設学科として国立二期試験後の入学試験

計測工学科の第1回の学生募集は学科新設のための認可手続きと予算措置の関係から試験日が遅れ1960年4月18、19日に行われ、定員40名に対して志願者1,072名、受験者926名、入学許可者41名で合格競争率は23倍の難関になっていた。

国立一期校、二期校の後に行われた試験のため、ほぼ全国から受験者が集まり高い競争率になったようだった。

計測工学科の案内

わが国が高度の工業国家を建設する上において、計測工学を専攻する技術者の養成が要望されている。近代工業が設備更新によりオートメーション化されるに従って生産工程の全般に亘り広く且つ明確な認識の下に各種計測方法を考案し得る高級技術者を要求する官庁、会社の数は増加の前途を辿りつつあるのが現状である。

計測工学科の概要

本学に新設した計測工学科は計測数学、物理計測の理学的色彩の課程に機械計測、電子計測の工学的色彩の課程を配した理学と工学を融合した異色ある学科である。

講座の構成

第一講座 計測数学 第二講座 物理計測学
第三講座 機械計測学 第四講座 電子計測学

昭和35年度 名古屋工業大学(計測工学科)学生募集要項

名古屋市昭和区御膳所町 (電話・千種@2531~2534)

名古屋工業大学

1. 募集人員 (修業年限「昼間」4年、学士課程)
計測工学科 約40名

2. 出願資格
(イ) 高等学校を卒業した者。
(ロ) 通常の課程による12年の学校教育を修了した者。(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む。)
(ハ) 高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者。
(ニ) 外国において学校教育における12年の課程を修了した者。

3. 願書受付期間
昭和35年4月1日から4月15日まで。(願書も4月18日まで必要のこと。)
日曜日を除き毎日午前9時から午後4時まで。但し、期日は正午まで。

4. 選抜要項
入学者は学力検定、推薦選考及び出身学校長から提出される調査書の結果を総合して判定する。
(イ) 学力検定日時及び学力検定科目
(ロ) 学力検定の時間及び時間表

| 月 | 日 | 教 | 科 | 時 | 間 |
|-------|---|---|---|-------|-------|
| 4月18日 | | 数 | 学 | 9.00 | 12.00 |
| | | 社 | 会 | 13.00 | 15.30 |
| | | 国 | 語 | 9.00 | 12.00 |
| 4月19日 | | 外 | 語 | 13.00 | 15.30 |

5. 合格者発表
4月20日(計測工学科)本校(名古屋市昭和区御膳所町)内に掲示し、なお本人へては通知する。(合格者発表その他に関する電話による問合せには応じない。)

6. 出願手続
入学志願者は次の書類を一括して入学検定料金1,000円(小高料の場合は受取人等を指定しないこと)と共に出身学校を確定する期日までに本校(名古屋市昭和区御膳所町)に掲示するよう提出すること。提出の届きは右暫行規程とし、封筒表面に「計測工学科入学願書」と朱書きすること。次の(1)~(10)の項目の用紙は全て入学交付のものに限る。

(1) 入学願書
(2) 写 真 (各別製半角程度、出版前3ヶ月以内に撮影したもの、志願学科、氏名併合、出身学校及び撮影年月日を記入すること。)

(3) 受験票 (志願学科、氏名併合及び出身学校を記入すること。)

(4) 志願者カード (志願学科、氏名、本籍、住所、出身学校を記入すること。)

(5) 検定料領収証若し返付 (志願学科、氏名を記入すること。)

(6) 検定料領収証明 (本学所定の用紙に大学付録の紙、国・公立印刷、日本印刷又は保証所の印刷により昭和35年3月迄の期日における捺印の証明をうけたもの。)

(7) 又捺印は必要又は関係書類に捺印する。(捺印後は認めない。)

注意
ロ、推薦選考証明書は 検定をうけた郵便機関の封筒を使用し捺印の捺印をうけ、その封筒裏面に志願学科、氏名を必ず記入すること。

(8) 調査書 (出身学校にて作成したもの。)

(9) 封 筒 (寸法凡そ、4縦×20、5横)

(10) 封 筒 (寸法凡そ、4縦×20、5横)

郵送により入学検定料を提出するもの及び代理人をもって出願願書提出するもの。

昭和35年度(昭和35年4月18、19日)に通常の入試とは別途に行われた計測工学科学生募集要項。(計測工学科第一回入学生用)。大学の記録「月報」(第47号、昭和35年5月)によると志願者1,072、欠席者146、受験者926、入学許可者41であった。

2. ゼロその2: 入学式は二部入学式と一緒に

学科試験の合格者は41名だったが入学辞退者が1名出たようで、入学式で顔を合わせた同級生は合計40人だった。

競争率23倍の難関を突破してきた同級生は北は関東圏から南は九州までの遠隔地出身者が多く、最近の卒業生や学生のようにほとんどが東海圏出身とは違って全国区の学科だった。

また、国立一期校や二期校、有名私立校等の受験に失敗しながら、この年度のラストチャンスにチャレンジして競争を勝ち抜いてきた猛者ばかりの個性豊かな仲間だった。



3. ゼロその3: 主任教授一人、事務職一人で出発



文部省に学科申請をした時には専門課程のカリキュラムや教官の定員等については決められてはいても、学科発足時には学科主任教授に松永先生が、事務官には高校を卒業したばかりの朱雀ちょうさんの二人が決まっただけで、仮住まいの教官室と事務室のそれぞれ座っておられた状況だった。教養課程の期間はそれでも大丈夫だったが専門課程になる前にはカリキュラムに合わせたコース別の教官、助手の方々が順次参加され、それなりの教員体制が出来てきた。

事務室は朱雀ちょうさんが一人で取り仕切り、1回生とは年齢的には近いこともあって事務室は学生の溜まり場になりいつも賑わっていた。



4. ゼロその4:事務室も教室も仮住まいから



生まれたばかりの学科なので教室、教官室、事務室は無いので既存の学科の空き部屋や教室を間借りする形で出発し、専門課程が本格的に始まる1961年度末(昭和36年)までには計測工学科の建物の一部が完成し、1962年度末には建物全体が完成し、必要設備もそろって卒業論文研究も出来るだけの教育体制が整った。



その設備の中には今では博物館でもお目にかかれぬパラメトロンを演算素子に用いた日立製のコンピューターHIPAC103があり、卒業論文研究の計算処理に活用されていたのを覚えている。

5. ゼロその5: 課外活動も40人の仲間の結束で活発に

工大祭は今でも活発に行われていると聞いているが、第1回生が入学した1960年代も非常に活発に行われていて、各々の学科がその特徴を活かした出展や仮装行列に知恵を絞って競っていた。

1960年の工大祭には40人の仲間が一致協力して、いろいろな計測方法を利用した出し物を展示したが、電流の流れる量を測って遊ぶ嘘発見器等が面白がられていた。



皆で一番苦労したのが仮装行列だった。

計測工学科のテーマは測定を得意とする学科らしく「測れないもの3題」。

一つ目は当時のソ連のフルシチョフ首相の脳の重さ。

二つ目は「私は嘘を申しません」とうそづく当時の池田首相の舌の厚さ。

三つ目は女心。

当時の仮装行列では実行委員会の審査

によって賞が与えられていたが、テーマの斬新さと40人の少人数でこれだけの作品を作った努力に対して審査委員から特別賞を頂いたのが今でも頭に残っている。



6. 第一回生の巣立ち:計測会の礎が築かれた



ゼロから始まった計測工学科だったが、1963年3月には40人の同期生全員が欠けることなく卒業することが出来、日本各地の産業界や大学院へと羽ばたいて行った。

これも一重に教官の皆さん、事務室関係者の皆さん、予算獲得に尽力いただいた学内の関係者の皆さんのおかげと感謝しています。

また1回生に続く学部学生、大学院学生の皆さんののおかげで「計測会」という同窓会も組織され、学科の名前は変わっても「計測会」としての流れが脈々と続いていることに第1回生を代表して心から感謝します。

